

我が町の教育を考える 〈その2〉

今回は教育の現場から、当面するいくつかの課題を取り上げます。

□全国学力・学習状況調査から

3年前に、40数年ぶりに復活した全国学力・学習状況調査、いわゆる「全国学テ」の結果はご承知の通り、本県は毎回最下位クラスを低迷し、同様に体力テストの結果も重なって、深刻な事態を招いています。

では、本町はどうかと言いますと、例えば昨年度の結果では、中学校はいずれも県平均を上回り、教科によっては全国平均も超えています。小学校も、おおむね県平均と同等のレベルで、小中学校ともに平均的な水準といえます。体力テストの方も、ほぼ良好な結果が出ています。

ただ、気になるのは「将来への夢や希望」に関して毎年数値が低いことで、ここがまず課題だととらえています。その背景には、地域環境も含めいろいろな理由が考えられますが、学校での、子ども同士のコミュニケーションも要因の一つと思われる。

多くの仲間との交遊の中で夢や進路が話題になり、相互に刺激し合いながら将来への意識化が進んでいくケースが多いのですが、これだけ子どもの数が少なくなった現在では、それはなかなか難しいと言わなければなりません。

□部活動の現状から

このところの児童生徒数の減少は、中学校の部活動にも大きな影響を及ぼしています。団体競技で一定の人数を必要とする、男子ソフトボール部や女子バレーボール部などでは、もはや1校単独のチームを組めなくなりました。実際に、両部では池川中学校と吾川中学校が合同のチームを作って、大会に出場している現状です。

確かに、合同でやる良さもありますが、やはり単独チームに勝るものはないはずです。中学校の教育活動にあっては、学習と共に「車の両輪」に

たとえられる部活動ですので、何とか解決できないものかと、そんな思いに駆られます。



男子ソフトボール部
池川中・吾川中合同チーム

□目指す子ども像

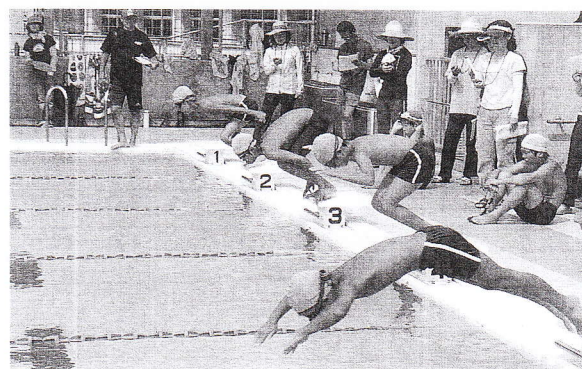
現状からの課題としてもう一つ、これは地域性とも関わっていそうですが「自己表現力」が挙げられます。

本町の子どもは、素直さ、まじめさなど得難い気質を備えている反面、自らの思いや考えをきちんと表現する点で、やや消極的な傾向が見受けられます。この表現力は「生きる力」を育む大事な要素です。児童生徒数の減少が表現力にも影響し、引っ込み思案な言動を助長するのではないかと、懸念する声もあります。

町内の全教職員で組織される「仁淀川町教育研究会」では、このような実態を踏まえ「目指す子ども像」を設定してきました。

各校それぞれの子どもの様子や校区の状況など

を出し合って、共通の目標として掲げたのが『元気で生き生きと活動できる子どもの育成』です。言葉の通りで、人数は少なくなっても一人一人の子どもに、とにかく元気で、たくましく育ててほしいという願いにほかなりません。



小学校水泳記録会の様子